



●印は全て収容所。大小合わせ8,000～9,000とも言われる。(国境線は当時のもの)



いのち・ゆめ・人間らしさ フリードル先生とテレジン収容所の小さな画家たち

2026年

1月7日(水)ー1月25日(日) 8:30-22:00 (25日は17:00まで) プラッツ5階フリースペース

1月26(月)ー1月27日(火) 10:00-17:00 プラッツ6階第2会議室



テレジン収容所

チェコ北部にある小さな街 テレジン (13.52km²〔府中市29.43km²〕)。
かつてアウシュヴィッツへの中継地として、街全体が収容所となった。
もとの住人6000人は追い出され、ユダヤ人を中心に連れて来られたのは14万4000人。
そのうち10歳～15歳の子どもたち15000人は親と引き離され働かされた。
生還できたのはたった100人だった。
戦後、奇跡的に4000枚の絵と10数編の詩が見つかった。

テレジン収容所での1日の時間割

(フェルディナンド・ブロッホ、トーマス・ゲーブ 資料より)

飢え、寒さ、親と会えない淋しさ、10時間もの労働、
死の不安の中で子どもたちの笑顔は消えた。



今も残る3段ベット(2011年撮影)

時間	活動内容	食事内容
朝 5:00	起床・朝食	コーヒーと呼ばれる茶色い水のみ
朝 6:00	整列 → 作業場へ行進 → 労働	—
昼 12:00	昼食	ピンポン球ほどの小麦粉団子が1つ入ったスープ
昼 13:00～	労働	—
夕方 18:45	労働終了 → 帰棟	—
夜 19:00	点呼・夕食	塩味のスープ+腐りかけの小さなジャガイモ または 固いパン切れ

開催によせて

私がテレジンの子どもたちの絵に出会ってから36年。
何も知らずに心を動かされたあの日から、奇跡のような出会いが続きました。イスラエルで絵を守った人、絵を教えたフリードルに恋した人…。子どもたちの絵は芸術品ではありませんが、命の輝きを放ち、見る人の心に語りかけます。絵の前に立ち、好きな絵を見つけ、その子の名前を呼んでください。そして、絵から聞こえる声に耳を傾けてください。

野村 路子

日本にテレジンの絵を紹介した 野村 路子氏

ノンフィクション作家・日本文藝家協会会員
テレジンを語りつくす会 代表



コピーライター、タウン詩編集長を経て、新聞・雑誌にエッセイ・ルポルタージュを執筆していたが、1989年チェコ・プラハでテレジンの子どもの描いた絵と出会い、その事実を伝えようと独力でチェコ文化庁と折衝。
交渉の末、ユダヤ博物館で撮影した子どもの絵の写真150点のフィルムを頂き、展示パネルを作成(原画は劣化が激しく持ち出せない)。1991年に日本全国23カ所を巡回する『テレジン収容所の幼い画家たち展』を開催し、現在まで230カ所以上続けられている。同時に、数少ない生存者にインタビューを重ね、執筆・講演会・歌と朗読のコンサートの活動も精力的に続け、平和と命の尊さを語り続けている。

～参考文献～ 野村路子著書

◎小学校6年・国語教科書(学校図書)「フリードルとテレジンの小さな画家たち」
「子どもたちのアウシュヴィッツ」(第三文明社)「15000人のアンネ・フランク」(径書房)
「テレジンの小さな画家たち」(偕成社)～産経児童出版文化賞大賞～「テレジン収容所の小さな画家たち詩人たち」(ルック)
「フリードル先生とテレジンの子どもたち」(第三文明社) 新刊「生存者たちの声を聴いて」(第三文明社)

資料提供 野村 路子

主催 府中市市民活動センター プラッツ 協力 テレジンを語りつくす会府中

問合せ 042-319-9703 042-319-9714 〒183-0023 東京都府中市宮町1-100
moshikomi@fuchu-platz.jp ル・シーニュ5,6階(京王線 府中駅南口直結)

府中市市民活動センター プラッツ



～子どもたちが見た夢～ 材料がない中、何にでも絵を描いた



ドリス・ヴァイゼロヴァー作
12歳でアウシュヴィッツへ

～蝶～

「ちょうちょになったら自由に飛んで行けるんだ。
あの高い塀を越え、有刺鉄線を越えて、
きれいな花の咲く野原へ。大好きな我が家へ。」

花と蝶を描いた絵がたくさん残っている。
描いている時、子どもたちの心は本当に飛び回って
いたのかもしれない。



スサナ・クライノヴァー作 生還

～家～

「大好きだった家。家族で暮らした楽しい思い出...
お気に入りのおもちゃ、料理のにおい、母の歌声、
父が名前を呼ぶ声、きょうだいの笑い声、
窓から見えたふるさとの景色。」

家の絵には、帰りがかった気持ちの表れか、一本の道が家
へと続いて描かれているものが多い。



ルース・ハイノヴァー作
10歳でアウシュヴィッツへ

～楽しかった思い出～

「春になると遊園地がやってきたね。
メリーゴーランドに乗るのが大好きだったんだ」

ブラハでは長い冬が終わり、春がくると移動遊園地がやっ
てきた。メリーゴーランド、ブランコ、アイスクリームの
店、子どもたちの嬉しい季節の始まりだった。



マリカ・フリードマンノヴァー作
12歳でアウシュヴィッツへ

～大人も協力した材料～ 書類と毛糸でできた作品

「家から持ってきた赤いクレヨンや青いクレヨンは
もうなくなってしまった...。白い紙も もない...。」

大人も協力をしてドイツ軍のゴミ箱から書類や封筒、箱の
蓋など材料を盗み出した。
「これを子どもたちに...」と着ているセーターをほどいて毛
糸を差し出した女性も。お母さんの温かさを感じる材料だ
った。

生きる喜びを教えた フリードル・ディッカー先生



ウィーン出身のユダヤ人画家。ドイツ・パウハウスで学び、類
い稀な才能を発揮。「芸術は世の中全体の調和の中にあるもの」
という信念を持ち、収容される前に潜んだ納屋でもユダヤ人の
子どもに絵を教え、収容所への呼び出し状が来た日には、あり
ったけの画材をトランクに詰め画家仲間からの救出を断ってテ
レジンへ向かった。

～独特の指導法で創造力を引き出した～

・「リズムに合わせて身体を動かしたり、線を描いたりするの
です。
この音を色にすると何色かしら？」

・「これはバラ、ポピー、これはフリージア...、さあ、目をつ
ぶって...
しずかに。そーっと香りをかいてみましょう、バラの香りがす
るでしょう？」 証言より

・「絵の授業は子どもたち全員を芸術家にするものではない。
創造性や独自性といった力を解放し、広げて想像力を目覚めさ
せ、
子どもたちの観察力や認識力を高め、強化することである。」
本人記述より



先生が収容所で描いた絵

テレジンで絵を描いた エディタ・ポラホヴァー（ディタ・クラウド）さん



番号の入れ墨が腕に残る

13歳でテレジンへ送られ、フリードル先生の教室が唯一の楽し
みだった。先生が花のない環境で花を描いてくれた事などを語
りついでいる。
テレジンからアウシュヴィッツ、さらにベルゲン・ベルゼンと
3つの収容所を母親と経験。
「きたないもの悲しいものを沢山見てきたから今は花の絵しか
描きません」と絵を描き続けた。
2025年10月、96歳で永眠。

絵運び出してくれた ビリー・グロアーさん



絵の教室が開かれた「女の子の家」の世話役だった。
1945年開放時、ドイツ軍は書類に火をつけ撤退。焼け残りの
下にフリードル先生が屋根裏に隠したとされる絵が残っている
のを発見。皆が生きたために金目のものに群がる中、ビリー
さんは2つのトランクに4000枚の絵と詩10数枚を詰め、60キ
ロの道のりを歩きブラハへ持ち帰りユダヤ人協会に届ける。
その20年後にトランクが開けられた。

